

## 谷徹教授 略歴 主要著書・論文目録

### 略 歴

- 一九五四年五月 愛知県一宮市に生まれる
- 一九七三年三月 愛知県立旭丘高等学校卒業
- 一九七三年四月 慶應義塾大学文学部入学
- 一九七七年三月 慶應義塾大学文学部哲学科倫理学専攻卒業
- 一九七七年四月 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程入学
- 一九八〇年三月 同大学大学院同研究科同課程修了
- 一九八〇年四月 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程入学
- 一九八五年三月 同大学大学院同研究科同課程単位取得退学
- 一九八五年四月 日本学術振興会奨励研究員・哲学（一九八六年三月まで）
- 一九八六年四月 九州歯科大学歯学部講師（一九九四年三月まで）
- 一九八九年八月 ヴッパータール大学（Bergische Universität - Gesamthochschule Wuppertal）研究滞在・ドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン州ハインリヒ・ヘルツ基金奨学金受給（一九九〇年八月まで）
- 一九九四年四月 城西大学女子短期大学部助教授（一九九六年三月まで）
- 一九九六年四月 城西国際大学人文学部助教授（二〇〇三年三月まで）
- 二〇〇三年四月 立命館大学文学部教授
- 二〇〇八年九月 ウィーン大学（Universität Wien）研究滞在、カレル大学（Univerzita Karlova）研究滞在・エラスムス・ムンドゥス奨学金受給（二〇〇九年九月まで）
- 二〇〇九年四月 立命館大学・間文化現象学研究センター長就任（二〇一九年三月まで）
- 二〇一一年四月 立命館大学文学研究科研究科長（二〇一二年三月まで）
- 二〇一四年九月 ウィーン大学（Universität Wien）研究滞在（二〇一五年三月まで）
- 二〇二〇年三月 立命館大学を定年退職

## 《主要著訳書および論文》

### I 著書

単著

『意識の自然——現象学の可能性を拓く——』、勁草書房、一九九八年一〇月  
『これが現象学だ』、講談社、二〇〇二年十一月

編著

『暴力と人間存在』、筑摩書房、二〇〇八年八月  
『間文化性の哲学』（立命館大学文学部企画叢書01）、文理閣、二〇一四年八月

共編著

『他者の現象学Ⅲ——哲学と精神医学の臨界——』、北斗出版、二〇〇四年一月  
『文化における〈時間〉——日独文化研究所シンポジウム——』、燈影舎、二〇一〇年七月

*Aufnahme und Antwort: Phänomenologie in Japan Bd. I, (Orbis Phänomenologicus, Perspektiven Bd.23), Königshausen & Neumann, 11011年  
四月*

共著

『現象学と解釈学』、世界書院、一九八八年一二月  
『現象学の現在』、世界思想社、一九八九年六月  
『現象学——越境の現在——』（『情況』別冊）、情況出版、一九九二年九月  
『他者の現象学Ⅱ』、北斗出版、一九九二年一〇月  
『プラクシスの現象学』、世界書院、一九九三年七月  
『岩波講座現代思想 6 現象学運動』、岩波書店、一九九三年二月  
『西洋哲学史——理性の運命と可能性——』、昭和堂、一九九四年四月

- 『歴史の現象学』、世界書院、一九九六年九月
- 『東方文化的現代承諾』（中国語訳・侯洪亮）、沈陽出版社、一九九七年七月
- 『生命論への視座』、大明堂、一九九八年一月
- Self-awareness, Temporality, and Alterity*, Kluwer Academic Publishers, 一九九八年六月
- 『快の行動科学』、朝倉書店、一九九八年九月
- Phänomenologie der Natur, Phänomenologische Forschungen: Sonderband*, Verlag Karl Alber, 一九九九年十二月
- 『〈哲学〉——〈知〉の新たな展開』、ミネルヴァ書房、一九九九年七月
- 『感覚——世界の境界線——』、白菁社、一九九九年二月
- 『西洋哲学史の再構築に向けて』、昭和堂、二〇〇〇年四月
- 『哲学的時代課題』（中国語訳・陳継東、校閲・卞崇道）、沈陽出版社、二〇〇〇年四月
- 『講座 生命 2000 vol.4』、河合文化教育研究所、二〇〇〇年五月
- 『〈対話〉に立つハイデガー』、理想社、二〇〇〇年十二月
- 『講座 生命 2001 vol.5』、河合文化教育研究所、二〇〇一年八月
- 『媒体性の現象学』、青土社、二〇〇二年七月
- Phenomenological Approaches to Moral Philosophy, A Handbook*, Kluwer Academic Publishers, 二〇〇二年八月
- Die erscheinende Welt, Festschrift für Klaus Held*, Duncker & Humblot GmbH, 二〇〇二年十一月
- 『知の教科書 ヘーゲル』、講談社、二〇〇四年三月
- 『講座 生命 2004 vol.7』、河合文化教育研究所、二〇〇四年十二月
- Phänomenologie und Gewalt, Königshausen & Neumann*, 二〇〇五年一月
- 『現代の哲学——西洋哲学史二千六百年の視野より——』、昭和堂、二〇〇五年十一月
- Leben als Phänomen, Königshausen & Neumann*, 二〇〇六年五月
- 『西洋哲学史観の再構築試論』、昭和堂、二〇〇七年一月
- 『道の手帖 ハイデガー』、河出書房新社、二〇〇九年三月
- Handbook of Phenomenological Aesthetics*, Springer, 二〇〇九年十二月
- Advancing Phenomenology, Essays in Honor of Lester Embree*, Springer, 二〇一〇年十一月
- 『空間と時間の病理——臨床哲学の諸相——』、河合文化教育研究所、二〇一一年一月

*Studien zur Weltgeschichte des Denkens, Denktraditionen – neu entdeckt, Bd. 2, Kulturelle Identität und Selbstbild, Aufklärung und Moderne in*

*Japan und Deutschland*, LIT Verlag, 2011年3月

『応用哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、2011年5月

*Globalisierung des Denkens in Ost und West*, Verlag Traugott Bautz GmbH, 2011年12月

*Husserl's Ideen*, Springer, 2013年5月

*Figuren der Transzendenz*, Köhnehauser & Neumann, 2014年5月

『〈生と死〉 日独文化研究所シンポジウム』、こぶし書房、2014年7月

『臨床哲学とは何か 臨床哲学の諸相』、河合文化教育研究所、2015年1月

*Leib, Ort, Gefühl, Perspektiven der räumlichen Erfahrung*, Verlag Karl Alber, 2015年4月

*Kontexte des Leiblichen*, Verlag Traugott Bautz GmbH, 2016年7月

『生命と死のあいだ 臨床哲学の諸相』、河合文化教育研究所、2017年1月

*Philosophie im gegenwärtigen Japan*, IUDICIUM Verlag GmbH, 2017年1月

『人稱をめぐって 臨床哲学の諸相』、河合文化教育研究所、2019年1月

*Lebendigkeit der Phänomenologie – Tradition und Erneuerung, Vitality of Phenomenology – Tradition and Renewal*, Verlag Traugott Bautz

GmbH, 2019年3月

*The Oxford Handbook of JAPANESE PHILOSOPHY*, Oxford University Press, 2019年9月

『〈言葉〉——日独文化研究所シンポジウム——』、こぶし書房、2019年10月

## II 事典（分担執筆）

『現象学事典』、弘文堂、1994年3月

『哲学・思想事典』、岩波書店、1998年3月

『政治学事典』、弘文堂、2000年11月

『事典 哲学の木』、講談社、2002年3月

*Routledge Encyclopedia of Philosophy*, Routledge (オンライン版)、2015年4月

### Ⅲ 論文

- 「フッサール晩年の遺稿における他者理論の展開」、『哲学』第74集（三田哲学会）、一九八二年五月
- 「現象学的反省と超越論的言語」、『哲学』第75集（三田哲学会）、一九八二年十二月
- 「フッサールの人格概念」、『倫理学年報』第33集（日本倫理学会）、一九八四年三月
- 「非主観的意識」、『理想』No.612、一九八四年五月
- 「キネステーズ意識と相互主観性」、『哲学』第80集（三田哲学会）、一九八五年五月
- "Life and the Life-world", in *Husserl Studies* 3, 一九八六年九月
- 「隠れたる自然——現象学と非現前の思惟——」、『現象学年報』4号、一九八八年一月
- "Heimat und das Fremde", in *Husserl Studies* 9, 一九九三年六月
- 「他者の精神医学と他者の現象学」、『福岡行動医学雑誌』Vol.2 Nr.1、一九九四年七月
- "Phenomenology and Interculturality" = 「現象学と間文化性」 in *IIAS Reports No.1995-003*, 一九九五年十二月
- 「フッサール現象学と目的論」、『現象学年報』11号、一九九六年一月
- "Inquiry into the I, disclosedness and self-consciousness – Husserl, Heidegger, Nishida –", in *Continental Philosophy Review* 31, 一九九八年一月
- 「現象学と形而上学」、『思索』第32号、一九九九年九月
- 「フッサール現象学 可能性の現在」、『思想』No.916、二〇〇〇年一〇月
- 「生と死の現象学」、『現代思想』総特集「現象学 知と生命」vol.29-17、二〇〇一年十二月
- 「現象学と経験の不可能性の条件」、『フッサール研究』創刊号・平成14年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇三年三月
- 「現象学の冒険」、『立命館哲学』第15集、二〇〇四年三月
- 「間（柄）の可能性の条件」、『日本の哲学』第6号——特集 自己・他者・間柄——、二〇〇五年十二月
- "«Klinische Philosophie» und das Zwischen", in *psycho-logik* 1, 二〇〇六年四月
- 「暴力論の基礎考察」、『暴力と人間存在の関わりについての理論的および実証的な全体研究』平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇八年三月
- 「危機と／の意味」、『文明と哲学』日独文化研究所年報創刊号、二〇〇八年十一月
- "The ego, the Other and the primal fact" (translated by Matthew Morgan), in *Continental Philosophy Review* volume 41, 二〇〇八年十二月
- 「遭遇と現象——方法の問題——」、『文明と哲学』日独文化研究所年報第2号、二〇〇九年十一月

「現象学と間文化性」、『現代思想』vol.37-16、二〇〇九年十二月

"Phenomenologija in kriza interkulturalnosti" (translated by Prevedel Aleš Košar) in *Phainomena*, XVIII/70-71, 二〇〇九年十一月

「文明・文化と言語」、『文明と哲学』日独文化研究所年報第3号、二〇一〇年十一月

「身体と混血」、『西田哲学会年報』第8号、二〇一一年七月

「危機における生と生活世界」(講演原稿"Life and the Life-world in Crisis"の邦訳・加筆版)、『立命館文学』第625号、二〇一二年二月

"Kultur-Leben-Welt: Phänomenologische Grundbegriffe zwischen Ost und West"『文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)「多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究」研究成果報告書(2008年度-2011年度)」』、二〇一二年三月

「文化・生命・世界…東西方之間現象学的基本概念」(中国語訳：鄭闢瑞)、『中国現象学と哲学評論 第十二輯 現象学…歴史と現状』、二〇一二年三月

「トラウマと再生」、『文明と哲学』日独文化研究所年報4号、二〇一二年六月

「あたわざる死」、『文明と哲学』日独文化研究所年報4号、二〇一二年六月

「つまらない・話」、『文明と哲学』日独文化研究所年報4号、二〇一二年六月

"Trauma, Civilization, Reproduction", in *Investigaciones Fenomenológicas*, 110-111年九月

「文明・文化と「一」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報5号、二〇一三年五月

"Fenomenologiziranje kulture" (translated by Robert Simonić) in *Phainomena* XXII/86-87, 110-114年三月

「文明・文化と「二」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報6号、二〇一四年三月

"Phänomenalisierung der Kultur", in *International Yearbook for Hermeneutics (Internationales Jahrbuch für Hermeneutik)* 110-114年七月

「文明・文化と「三」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報7号、二〇一五年四月

「「あわい」と現象学」、『情況』第四期四卷6号、二〇一五年八月

"Japanese Phenomenology", in *Oxford Handbook Online*, <http://www.oxfordhandbookonline.com/> 110-115年九月

「文明・文化と「四」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報8号、二〇一六年三月

「あいだであう——生命の実在?」、『現代思想』11月臨時増刊号 vol.44-20、二〇一六年一〇月

「文明・文化と「五」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報9号、二〇一七年三月

"Body, Language and Mediality", in *Yearbook for Eastern and Western Philosophy* 2017/2, 110-117年十一月

「文明・文化と「零」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報10号、二〇一八年三月

「文明・文化と「数」」、『文明と哲学』日独文化研究所年報11号、二〇一九年三月

## IV 翻訳

《単行本における翻訳》

単訳

『世界としての夢——夢の存在論と現象学——』、デトレフ・フォン・ウスラー著、法政大学出版局、一九九〇年十二月  
『ブリタニカ草稿——現象学の核心——』、エトムント・フッサール著、ちくま学芸文庫、二〇〇四年二月  
『内的時間意識の現象学』、エトムント・フッサール著、ちくま学芸文庫、二〇一六年十二月

共訳

『認知と言語』、エルマー・ホーレンシュタイン著、産業図書、一九八四年七月  
『生き生きした現在』、クラウス・ヘルト著、北斗出版、一九八八年十二月／一九九七年九月（新装版）  
『諸科学の機能と人間の意義』、エンツォ・パーチ著、法政大学出版局、一九九一年七月  
『マルクス主義と全体性』、マーティン・ジェイ著、国文社、一九九三年六月  
『手すりなき思考——現代思想の倫理・政治的地平——』、リチャード・J・バーンスタイン著、産業図書、一九九七年一〇月  
『暴力の屈折——記憶と視覚の力学——』、マーティン・ジェイ著、岩波書店、二〇〇四年九月  
『デリダ、脱構築を語る』、ジャック・デリダ、ポール・パットン、テリー・スミス編、岩波書店、二〇〇五年一〇月  
『マインド・クエスト——意識のミステリー——』、ダン・ロイド著、講談社、二〇〇六年一月

《学術誌・専門誌等における翻訳》

単訳

『有機体論と言語論』、フレデリック・バーウィック著、『現代思想』vol.21-08、一九九三年七月  
『ベンヤミン、記憶、第一次世界大戦』、マーティン・ジェイ著、『思想』Nr.926、二〇〇一年九月  
『影の国——時間・生・死をめぐるフッサールとハイデガーの対話——』、ハンス・ライナー・ゼップ著、『現代思想』総特集「現象学 知と生命」vol.29-17、二〇〇一年十二月  
『個体化の時間性と、形相的洞察の射程』、アンソニー・J・スタインボック著、『フッサール研究』創刊号・平成14年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇三年三月

「生…内部・外部」、ハンス・ライナー・ゼップ著、『フッサール研究』第4／5号…平成18年度科学研究費補助金資料集、二〇〇七年三月

# 共訳

「ポスト構造主義の挑戦」、マーティン・ジェイ著、『現代思想の饗宴』、一九八六年三月

「まなざしの帝国にて——フーコーと二〇世紀のフランス思想における視覚の名誉剥奪——」、マーティン・ジェイ著、『現代思想』vol.153、一九八七年三月

## V 書評、総評、新刊紹介

「エトムント・フッサール『空想、形象意識、想起』"Husserliana BdXVIII"」、『美学』第126号、一九八一年九月

「オイゲン・フィンク『ヘーゲル』」、『週刊読書人』、一九八七年一月

「『哲学』収穫と動向——88年年末回顧——」、『週刊読書人』、一九八八年二月

「鷺田清一『分散する理性』」、『週刊読書人』、一九八九年六月

「高橋哲哉『逆光のロゴス』」、『週刊読書人』、一九九二年八月

「ミシエル・アンリ『精神分析の系譜』」、『週刊読書人』、一九九三年七月

「クラウス・ヘルト『現象学の最前線』」、『週刊読書人』、一九九四年七月

「J・L・マリオン『還元と贈与』」、『週刊読書人』、一九九五年三月

「E・フッサール『現象学の理念』」、『週刊読書人』、一九九七年八月

「松尾正『存在と他者』」、『九州神経精神医学』第43巻第3／4号、一九九七年十二月

「中村雄二郎『述語的世界と制度』」、『週刊読書人』、一九九八年九月

「長滝祥司『知覚とことば』」、『図書新聞』、一九九九年七月

「河村次郎『時間・空間・身体』」、『週刊読書人』、一九九九年七月

「実川敏夫『メルロ＝ポンティ 超越の根源相』」、『週刊読書人』、二〇〇一年三月

「新田義弘『世界と生命』」、『週刊読書人』、二〇〇一年一月

「加國尚志『自然の現象学』」、『週刊読書人』、二〇〇二年六月

「斎藤慶典『フッサール 起源への哲学』」、『図書新聞』、二〇〇二年七月

- 「デイディエ・フランク『現象学を超えて』」、「週刊読書人」、二〇〇三年七月
- 「長滝祥司編『現象学と二十一世紀の知』」、「週刊読書人」、二〇〇五年四月
- 「中敬夫『自然の現象学——時間・空間の論理』」、「フランス哲学・思想研究」、二〇〇五年
- 「山口一郎『存在から生成へ』」、「週刊読書人」、二〇〇六年二月
- 「誤訳問題にあらず——山口一郎氏の論に対して——」、「週刊読書人」、二〇〇六年三月
- 「鷺田清一『待つ』ということ」、「週刊読書人」、二〇〇六年一〇月
- 「ヤン・パトチカ『歴史哲学についての異端的論考』」、「週刊読書人」、二〇〇七年一月
- 「貫成人『真理の哲学』」、「週刊読書人」、二〇〇八年五月
- 「藤野寛氏の書評に対して」、「週刊読書人」、二〇〇八年二月
- 「新田義弘『思惟の道としての現象学』」、「図書新聞」、二〇一〇年四月
- 「榊原哲也著『フッサール現象学の生成「方法の成立と展開」』」、「実存思想論集」XXVI、二〇一一年六月
- 「エンツォ・パーチ『関係主義的現象学への道』」、「図書新聞」、二〇一二年二月
- 「酒井潔・佐々木能章・長綱啓典編『ライプニッツ読本』」、「週刊読書人」、二〇一三年五月

## VI 報告

- 「ドイツの現在の哲学的状況」、「週刊読書人」、一九九〇年一〇月
- 「1999年度 大会講演会報告」、「日本デイルタイ協会会報 No.28」、二〇〇〇年三月
- 「暴力と欲待——マーティン・ジェイ、キャサリン・ギャラガー講演会の報告——」、「読書人」、二〇〇五年一月
- 「海外事情…ウィーンのカフェから欧州三都物語」、「現象学年報」25号、二〇〇九年十一月

## VII 総説および解説

- 「フッサールとハイデガー」、「数学セミナー」、一九九二年三月
- 「哲学入門者のための基本用語解説」、「哲学がわかる。」、一九九五年二月
- 「世界と現代思想」、「Satya 34」、一九九九年四月

- 「現代哲学のキーワード」、『現代哲学がわかる。』、二〇〇二年一月
- 「哲学者の歩んだみち フッサール」「哲学にふれる基本用語事典」、『新版 哲学がわかる。』、二〇〇三年十二月
- 「現代思想の古典 フッサール『デカルト的省察』」、『現代思想』臨時増刊号、二〇〇四年九月
- 「思想の言葉——現象学と突破——」、『思想』、二〇〇四年十二月
- 「解説に代えて——あいだへの招待——」、木村敏著『あいだ』、二〇〇五年九月
- 「解説」、(新田義弘著『現象学と解釈学』、二〇〇六年八月
- 「『主体性』の消滅?」、『鯨光』第582号、二〇〇六年九月
- 「亡命哲学者たち——ニーススクール」、『哲学の歴史第10巻 危機の時代の哲学…20世紀I…現象学と社会批判』、二〇〇八年三月
- 「書物が私を作った」、『哲学の歴史 別巻』、二〇〇八年八月
- 「回想——近さと遠さ」、『渡邊二郎著作集』第11巻月報6、二〇一一年三月
- 「七九九年の河の流れ 鴨長明『方丈記』」、『現代思想 総特集 震災以後を生きるための50冊』7月臨時増刊号 Vol.39-9、二〇一一年六月
- 「フッサールの問いは終わらない」、E・フッサール著、船橋弘訳『フッサール デカルト的省察』、二〇一五年十一月
- 「『現象学』新田義弘著」、『わたしが選んだこの一冊』、二〇一九年六月

## VIII 雑誌編集および序論

- Review of Japanese Culture and Society Vol.VII – Encounter with the Other: Philosophical Perspectives from Japan and the West*, Center for Inter-Cultural Studies and Education, Josai University, 城西大学国際文化教育センター、一九九五年十二月
- Review of Japanese Culture and Society Vol.XI & XII – Violence in the Modern World (Special Issue)*, Center for Inter-Cultural Studies and Education, Josai University, 城西大学国際文化教育センター、二〇〇〇年十二月

## IX 対論・討論・鼎談・座談会・インタビュー

- 「現象学と『暴力』 高橋哲哉 vs 谷 徹」、『理性と暴力——現象学と人間科学——』、一九九七年五月
- 「現象学の現在と未来——現象学の可能性——」、『フッサールを学ぶ人のために』、二〇〇〇年一〇月
- 「鼎談 アクチュアリティとヴァーチュアリティの関係をめぐって 木村敏・谷徹・斎藤慶典」、『講座 生命 2004 vol.7』、二〇〇四年十二月

「間文化現象学という〈実践〉」 谷徹＋松葉祥一、「現代思想」vol.38-7、二〇一〇年五月  
「シヴィライゼーションと哲学 鷲田清一×谷徹」、「文明と哲学」日独文化研究所年報第3号（日独文化研究所）、二〇一〇年十一月  
「知のアトリエを求めて」、「知のアトリエを求めて——立命館土曜講座3000回記念——」、二〇一一年一〇月  
「もの」と「かたり」の物語り、「文明と哲学」日独文化研究所年報6号（日独文化研究所）、二〇一四年三月  
「谷徹氏インタビュー『文明と哲学』——ことばの力を使いながら、未来、すなわちまだ来ていないものに対する道を準備——時間的な「あいだ」ということがより鮮明に見えてくるような「と」を実現したい」、「図書新聞」、二〇一五年七月

## X 学会・研究会等における口頭発表・講演・コメンテーター・司会

「超越論的概念としての生活世界」、於・日本現象学会第6回大会、一九八四年九月  
「経験的なものと超越論的なもの」、於・第9回現象学解釈学研究会シンポジウム、一九八六年一〇月  
「内観」、於・東京都精神医学総合研究所現象学ゼミナール、一九八七年二月  
「反省と言語」、於・東京都精神医学総合研究所現象学ゼミナール、一九八七年六月  
「夢の現象学」、於・東京都精神医学総合研究所現象学ゼミナール、一九八八年一〇月  
「原故郷と異他世界」、於・文部省科学研究費総合研究グループ、一九九一年一月  
"Facticity and its Ground – the Possibility of a Meontic Metaphysics –", at American/Japanese Phenomenology Conference 1992, 一九九二年一〇月

「現象学と現代の自然哲学」、於・第15回現象学解釈学研究会シンポジウム（八王子・大学セミナーハウス）、一九九二年一月  
「フッサール現象学と目的論」、於・日本現象学会第16回研究会シンポジウム（神戸大学）、一九九四年一月  
"Three Phenomenological Perspectives of Time", at New School for Social Research, 一九九四年一月  
「三つの現象学的時間論」、於・三田哲学会、一九九四年二月  
「現象学と歴史」、於・解釈学シンポジウム（鳥羽）、一九九五年三月  
「現象学と間文化性」、於・国際高等研究所基礎研究〈哲学〉ワークショップ「インターカルチャー世界の構造」、一九九五年四月  
「現象学成立の時代背景」、於・実存思想協会・ドイツ観念論研究会・合同シンポジウム「ヘーゲルとハイデッガーの間」（早稲田大学）、一九九五年九月  
「フッサール現象学と世代性」、於・現象学社会科学会（早稲田大学）、一九九五年一月

"Mähen und Weltall – drei Probleme der gegenwärtigen Phänomenologie –", at Institute of Theoretical Studies, Charles University, 一九九六年

一二月

"The Physis of Consciousness and Metaphysics" at the Phenomenological Conference on Self-Awareness, Temporality and Alterity, Copenhagen University, 一九九六年一二月

"Natur und Interkulturalität" at IIAS-GIP International Symposium, "Die Struktur der interkulturellen Welt", 於・国際高等研究所、一九九七年二月

「なぜ時間なのか——現象学の射程と境界——」、於・東北大学、一九九七年三月

「『真理』の差異化と『生』の差異化」、於・第21回現象学解釈学研究会シンポジウム「生命と他者——ポストモダン状況における現象学と精神医学——」、一九九八年一二月

「オートポイエーシスと現象学」、於・駒場哲学協会2002年春期フォーラム・シンポジウム「認知科学と現象学」（東京大学・駒場）、二〇〇二年三月

「間違いだらけの現象学書?」、於・東西哲学研究会（学士会館本館）、二〇〇三年七月

「突破と暴力」、於・哲学懇談会第1回（東洋大学）、二〇〇四年七月

共同司会（谷徹・内海健）：（提題：津田均・廣瀬浩司・加藤敏・坂部恵：コメンテーター：木村敏・野家啓一）、於・第4回河合臨床哲学シンポジウム「越境する身体」（国立博物館平成館）、二〇〇四年一二月

"Phenomenology of Perception, Image and Language" at Seoul University, 二〇〇五年九月

"On the Conditions for Possibility of *Aidagara* (Between-ness)" at the Korean Society for Phenomenology at Seoul University, 二〇〇五年九月

共同司会（木村敏・谷徹）：（提題：新田義弘・山形頼洋・鈴木國文・内海健：コメンテーター：坂部恵・津田均）、於・第5回河合臨床哲学シンポジウム「気分の現象学と病理」（国立博物館平成館）、二〇〇五年一二月

「主体性」の消滅?」、於・東京鯨光会月例会（グランドアーク半蔵門）、二〇〇六年七月

共同司会（谷徹・津田均）：（提題：木村敏・大橋良介・藤山直樹・浜渦辰二：コメンテーター：坂部恵・内海健）、於・第6回河合臨床哲学シンポジウム「〈あたり〉の虚と実」（国立博物館平成館）、二〇〇六年一二月

共同司会（木村敏・谷徹）：（提題：渡辺哲夫・河本英夫・北山修・坂部恵：コメンテーター：内海健・斎藤慶典）、於・第7回河合臨床哲学シンポジウム「〈作ること〉と〈作りごと〉」（国立博物館平成館）、二〇〇七年一二月

"Sense as Sending", 於・日仏共同哲学研究会「オントロジーと現象学」（慶應義塾大学）、二〇〇八年七月

"Sinn und Gewalt", Work Shop "Phänomenologie und Gewalt" at Institut für die Wissenschaften vom Menschen, Wien, 二〇〇八年一〇月

"Transzendenz und Medium" at Workshop "Phänomenologie der Transzendenzverfahren", Otterthal, Österreich, 二〇〇九年四月

"The Uniqueness of the World" at the Unit for interdisciplinary and intercultural Research of the University of Vienna, "Intercultural Philosophy and Chinese Medicine", Institut für Wissenschaft und Kunst, Wien, 二〇〇九年五月

"Phänomenologie der interkulturellen Krisis" at Bergische Universität Wuppertal, Wuppertal, Deutschland, 二〇〇九年五月

"Kultur—Leben—Welt: Phänomenologische Grundbegriffe zwischen Ost und West", at Universität Würzburg, "Identität – Differenz, Selbstheit – Fremdheit, Interkulturelle und globale Herausforderungen, Philosophische Annäherungen", Gesellschaft für interkulturelle Philosophie, 二〇〇九年七月 (第二回文化現象学シンポジウム・立命館大学にて再読 二〇一〇年一月)

"Phänomenologie und die Krisis der Interkulturalität", at Ljubljana, Slovenska matica, "Interkulturalität – Alterität – Fremdheit" (Institut Nove revije, zavod za humanistiko in Fenomenološko društvo v Ljubljani), 二〇〇九年九月

「時に思索」於・河合臨床哲学シンポジウム (中央大学駿河台記念館) 二〇〇九年十二月

"Ostasiatisches und europäisches Denken in der ekstatischen Struktur des Phänomens", 「從東亞的視角談跨文化哲學」 德語工作坊 Workshop: Transkulturelles Philosophieren aus ostasiatischer Sicht, (中山大学 高雄・台湾) 二〇一〇年十二月

"A Phenomenological Approach to Interculturality", the 4th International Conference of P.E.A.CE (Phenomenology for East Asian Cercle), (中山大学 高雄・台湾) 二〇一〇年十二月

"Life and the Life-world in Crisis", IV OPO Meeting, (Organization of Phenomenological Organizations), Keynote Speech at IE Universidad, Segovia, Spain, 二〇一一年九月

「間文化現象学——日中欧の文化的混血のなかで」於・第3回日中哲学フォーラム「日中の哲学者は現代と世界をどう捉えるか」(日本哲学会・中国社会科学院哲学研究所) (慶應義塾大学、日吉キャンパス) 二〇一一年二月

共同司会 (内海健・谷徹) : (シンポジスト: 村上靖彦・柴山雅俊・川瀬雅也・花村誠一、コメンテーター: 野家啓一・津田均) 於・「第11回臨床哲学シンポジウム——他者の諸位相、多性の諸位相——」(鉄門記念講堂) 二〇一一年十二月

共同司会 (内海健・谷徹) : (シンポジスト: 木村敏・鷺田清一、コメンテーター: 野家啓一・鈴木國文・兼本耕祐・出口康夫) 於・「第12回臨床哲学シンポジウム——臨床哲学とは何か——」(鉄門記念講堂) 二〇一二年十二月

"Die Phänomenalisierung der Kultur", Philosophische Konzeptionen von Raum und Selbst – Ein deutsch-japanisches Symposium, 於・関西学院大学・上ヶ原キャンパス 二〇一三年三月

"*Utsushi, Shirushi* and Mediation – the philosophy of Sakabe Megumi –", SPEP 52 (52<sup>nd</sup> Meeting of the Society for Phenomenology and Existential Philosophy), at Hilton Eugene and Conference Center Eugene, 二〇一三年一〇月 (中山大学で再読 二〇一九年一月)

コメンテーター (谷徹・内海健・榊原哲也・津田均) : (シンポジスト: 木村敏・野家啓一、共同司会: 鈴木國文・浜渦辰二) 於・「第13回臨床哲学シン

ンポジウム——臨床哲学とは何かⅡ——」(鉄門記念講堂)、『二〇一三年二月

パネリスト(石原孝二・向谷地生良・谷徹)、於「当事者研究の現象学(4) ワークショップ2: 当事者研究と現象学／現象学的実践としての当事者研究」(東京大学・駒場) 18号館ホール、『二〇一三年二月

Roundtable: The Future of Phenomenology in East Asia (Moderator: Kwok-ying Lau, Speakers: Nam-In Lee, Toru Tani, Kuan-Min Huang, Xianghong Fang), at the Chinese University Hong Kong, 二〇一四年五月

"Zwischen und Begegnung – im Zusammenhang mit Megumi SAKABE's Interpretation der Moderne", Diskurse der Moderne/n aus interkulturell-transkultureller Perspektive, XXIII. Deutscher Kongress für Philosophie (Deutsche Gesellschaft für Philosophie), am Schloß, Westfälische Wilhelms-Universität Münster, 二〇一四年九月

Podium: "Heidegger interkulturell?", Toru Tani, Georg Stenger, Helmut Vetter, Moderator: Martin Ross, IWG Universität Wien, 二〇一四年一〇月

"Sein, Erscheinen und Kultur", Phänomenologische Forschungen (Vortragsreihe), Universität Wien, 二〇一五年一月

"Phänomenalisierung der Kultur", Phänomenologische Forschungen (Workshop), Universität Wien, 二〇一五年一月

"The Kaizo Articles and the "translation" of phenomenology", "humilitas & humanitas, Letture filosofiche in Ambrosiana, Attualità della crisi delle scienze europee", "Da Rinnovamento. Problema e metodo" di Edmund Husserl", Veneranda Biblioteca Ambrosiana, Milano, 二〇一五年二月

"*Awai* – the Japanese concept of betweenness", The Workshop of "Phenomenology and Oriental Philosophy", The Institute of Phenomenology of Sun Yat-sen University, Guangzhou, China, 二〇一五年四月

総合司会:(シンポジスト: 和田信、金森修、深尾憲二郎、大橋良介、コメンテーター: 内海健、野家啓一、全体討論: 木村敏)、於「第15回河合臨床哲学シンポジウム「生きられる死」(鉄門記念講堂)、『二〇一五年二月

「媒体性の現象学的形而上学」於「土井道子記念京都哲学基金「形而上学と現象学」(京都ガーデンパレス)、『二〇一六年九月

「身体、媒体、あひだ」("Body, Medium, In-Between")於「移り: Übergänge, Transitions」, 4th Conference of the European Network of Japanese Philosophy, Universität Hildesheim, 二〇一八年九月

「人稱と文化」(中国語訳「人稱與文化」)於「第二十四届中国現象学会年会(中国現象学会、浙江大学現象学與心性研究中心、浙江大学哲学系)、『(之江飯店會議中心、中国・杭州市)、『二〇一九年一〇月

## XI その他

- 「バーンスタイン教授夫妻を迎えて」、「『国際文化教育センター季報』No.15、一九九四年七月
- 「『手すりなき思考』刊行にあたって」、「『国際文化教育センター季報』No.28、一九九八年七月
- 「国際シンポジウム『暴力の現在』を終えて」、「『国際文化教育センター季報』No.33、二〇〇〇年一月
- 「二期無会と二期二会の間で」、「中村雄二郎著作集」第二期VI月報8、二〇〇〇年十二月
- 「国際シンポジウム「多元化する世界とコミュニケーション」、於・城西大学、一九九四年五月
- 「国際シンポジウム「暴力の現在」、於・城西国際大学、一九九九年一〇月
- 「執筆ノート『これが現象学だ』」、「三田評論」No.1056、二〇〇三年四月
- 「ベルクガッセ19番地を訪ねて」、「フロイト全集 第16巻」・『月報14』、二〇一〇年三月
- 「ヴァッパートルの出会い、京都の別れ」、「理解と独創の人 山形頼洋の思い出」非売品、二〇一一年一月
- "Doing Phenomenology Together in Different Ways" in *Investigaciones Fenomenológicas, Sociedad Española de Fenomenología*, 1101 八年三月

